

鈴木勝忠校

江戸座落集

三

古典文庫

鈴木勝忠校

江戸座落集

三

古典文庫

古典文庫第二五四冊 ©

昭和四十三年九月十五日印刷発行

非売品

校者 鈴木勝忠

三 発行者 吉田幸一

江戸座俳諧集

東京都板橋区熊野町三四

印刷者 帝都印刷製本株式会社

発行所

114 東京都北区
西ヶ原三ノ三四ノ一二

古典文庫

電話(九一〇)二七一七
振替口座東京一四五九七番

目次

一、	諧俳
落	
葉	
合	
	三

二、	園
圃	
錄	
	四

俳諧

落

葉

合

全

俳諧

落葉合

全

俳諧の集つくる事古今にわたりて此道のおもて起すへき時なれやとは
晋子猿蓑の序なり其さるみのや正統二編の歌仙或はあら野の哥儷はま
ことに俳諧の正風なりと人はしらす予は俳涙を流しぬしかはあれと芭
蕉の

└

翁のもうされける我風雅は唯釈阿西行の言葉のみ仮初にいひちらされ
しあたなるたはふれこともあはれなるところ多きをそたふとめる其細
きひとすしをたとりうしなふ事なかれと門人にはしめし給ひしとかや
されはこそから

└ 一ウ

ひかちにて花なるかたのすくなく覺ゆれ門人に其角嵐雪ありて華実相
対の俳集世にもてはやす事ひさし元禄八つのとしに歟若葉合といへる
集あり其連十人皆独吟の歌仙を合て佳吟秀作花うつくしく実猶こまや
かなり斯

集のうらやまれ侍れは其あとを追而独吟十哥仙をあつめ号て落葉合と
いふ藤の若葉に今の予かおち葉を合せはかの静然上人の眉白く意たけ
たるたふとさと老さらほひたるもたれ文とを競られしたはふれならん
と独咲して於独歩菴自叙

享保十六年亥年十月

餘	徳	無
波		窮

超	印
波	

「二ウ

「

」

「三ウ

第一

超波

むく犬のしつかに歩行落葉哉

霜をちからに日和定める

木薬屋いつしか杖を売初て

人怖しにも詩は作りたい

惜しいとて寝ぬもつまらぬ月夜さし

翌咲花をあてる朝顔

ウ

堀井戸の中にはえたる艸の露

世盛の時たてし石塔

餅米が多くて母の機嫌よし

レ

通り違ひに文をうけ取る

化粧坂影も形もなかりけり

鏡に向ひ我をわすれて

身ひとつを慰めかねつ寒念仏

目赤不動の横町の富士

掛物や鼓の革やくわんぜより

花の下トにて敲かれて来る

鶯は鼠に取られ朝の月

青い蛙のいそくと飛ぶ

ナ

楊弓の似合ぬ所感應寺

したれ桜に五月雨の泥

「
四
ウ

腹立や帶をしめれば髪かどけ

寝しなになると名を書いて見る

嘘のない年きゝたさに手をまはし

刀をさして笑はせる妓有

陶へ太神宮と入ほくろ

雪か見たくは明店の前

うは玉の炭団のむしろ二ッ折

しば／＼月の雲を行ぬけ

声聞て雁来瘡をためさはや

身に初鮭のおもひきられぬ

ウ
段ゝと手代に倒れ歌枕

「
五ウ

畠作らは嫉捨の裾

うしと見しうこんの衣さめ返り

つりがね乗せて船は出て行

世の常の曇と違ふ花曇

ふたつ三ッ葉に四ッ姫菜摘

第二

永機

輪かけに日なたはとられ落葉哉
ほし菜の窓をきりくす這

人ひとり鞘鳴りのする閑居えて

「」
六
ウ

鱸へもとゝかぬほとな船頭

雨雲の中から月の舌を出し

烁海棠のさく歟凋む歟

ウ

木兎に赤子の頭巾借して遣り

人事をいふ内義てはある

手拭てからけて来たとゝけ文

上屋舗とは見えぬ枳殻

水囊と盆を提たは螢狩

道灌山の夏の夜の霜

をのかでに謡て心取直し

いかなる年そ名人か死ぬ

「
セウ

「

糺室出る方角はなかりけり

灯心売ていとゝ片町

をつとつて物の書たい花の寺

多くもなかぬ藪のうくひす

ナ

いかめしく恋する猫のぬしや誰

くちなし飯に奈良茶経たり

霄からは寝られぬ程の髪の出来

若黨つれて惣嫁見に行

放亀の又もや縄にかゝりけむ

祐天様の忌日にも降る

我なから気のはりたる粉な篩

└

身をしからみに冬中の梨

来て見れは指出の磯に鳶鳥

道陸神を艸鞋にて埋め

有り／＼と旋風の跡に暮の月

青物屋から豆腐屋へ露

ウ

秋の蚊の命限りに喰らひつき

日除て武士に成し衣／＼

憎いほと男壮の久しさよ

駈る座頭の手か先へ出る

盗むにも風呂敷丈の花の枝

あふない橋の裏にたんほゝ

「
八
ウ

第三

長水

山築の手を尽させて落葉かな
いとゞ梨地の火桶さひしき
みとり子の大福帳に跨かりて
迎の者の欠ひ聞ゆる

したゝかに洩来る月の古厩

楮所はみな花の窓

ウ

茸狩の欲の深さは谷を飛

磨くが中に黒い友達

「
九
ウ

「